



見返し 表・裏 城端の街並

金沢工業大学土屋研究室 (昭52. 9 作図)

城端曳山史

城端町曳山史編纂委員会編



豪華絢爛曳山行列



唐子山の布袋像



竹田山の恵比須像



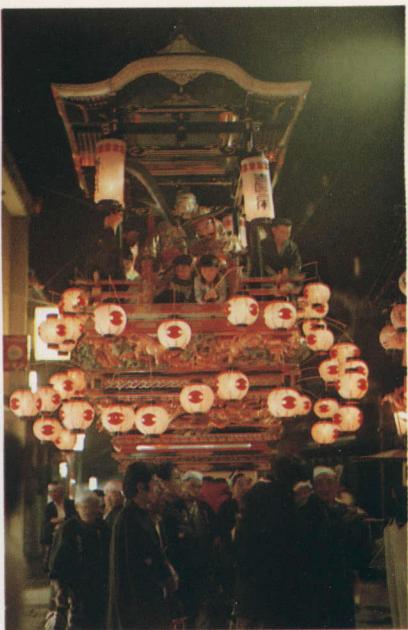
東耀山の大黒天像



鶴舞山の大八車



諫鼓山



千枚分銅山の夜景



神幸の御巡幸



傘鉾行列

序

開町四百余年の歴史と伝統をもつ我が城端町に、江戸時代中期から今日まで連綿として受け継がれている曳山祭は、町民が他に誇ることのできる大きな祭礼行事であります。

それは江戸時代からの古い祭礼形式を現在も保持しているもので、富山県における貴重な文化財・民俗資料として高く評価されているものであります。

連山の深い雪も漸く融けて、県の天然記念物である蠟山の越の彼岸桜に続いて、繩ヶ池の「みずばしょう」の花が咲く頃から曳山祭の準備が始まり、若連中の庵屋台唄の稽古の優雅な音色が夜毎に町内に流れ、そこはかとなく人の心を浮き立たせ祭りへとかりたてていくのであります。

五月十五日には獅子舞、剣鉾、それに八本の傘鉾の先導で三基の神輿、それに続いて城端独特の庵唄にのせて、六台の庵屋台と曳山が練り廻る豪華絢爛な曳山祭は、近郷近在からの人出で大きな賑いを呈するのであります。

この曳山祭については昭和三十四年出版の城端町史にも一部は掲載されているのでありますが、今度は、これをさらに詳細に組織的に調査研究し、歴史的な解明を施して纏め「城端曳山史」として刊行することになったのであります。

昭和四十八年五月、編纂委員会が正式に発足し、監修を城端町史と同じく富山大学の坂井誠一教授

にお願いして作業が進められました。

それから四年有余の永きにわたり、ご多忙な中にも拘らず、監修の先生をはじめ調査研究・執筆・編集等々について多大なご尽力を賜った委員各位や貴重な資料を提供して下さった方々に対し、ここに、あらためて心から厚く御礼申し上げます。

曳山祭に焦点を合せた、いわば第二の町史であるこの「城端曳山史」が、これから多くの人々に愛読されますよう切望して止まないものであります。

また、これを機会に、この曳山祭が単に城端町民や出身者だけのものではなく、広く県内外のみなさんの祭りとして親しまれ、また、心のふるさととして愛されるよう民俗資料として県の指定を受けたいものと心から念願している次第であります。

昭和五十二年十月吉日

城端曳山史編纂委員長

城端町長 田嶋

茂

監修者のことば

私は、かつて「城端町史」を監修執筆した縁によつて、このたび「城端曳山史」の監修を御受けいたしました。私は富山大学教授としての本務のほかに、富山県史編纂専門委員（近世編執筆主任）として、富山県史の編纂にも責任をもつております。そしてこの方の仕事は、長年努めてきた越中の近世史料の調査研究をほぼ終えて、この近年に至つてようやく近世史料編三冊、通史編二冊の出版が軌道にのり始めました。また私自身の研究について言えば、これも十年ほど前から心がけてきた研究が実つて、その成果として成った「加賀藩改作法の研究」を学位請求論文として提出していたところ、本年三月文学博士の学位を授与されました。本書の監修を御受けした昭和四十八年頃は、この学位論文の執筆中でありました。

このように、内外ともに非常に多忙の時に、あえて本書の監修執筆を御受けしたのは、城端町史編纂の過程で、故洲崎哲二氏に招かれて拝見した城端の曳山祭りの素晴らしさが、強烈に心中に甦つてきたからであります。

その頃のことを想起すると、ことの起りはたしか昭和二十八年三月、この山麓の町の春なお浅い頃、この町の文化会で講演をするために招かれた折に、洲崎氏から町史編纂の計画があること、町史の根本史料として元禄六年の「組中人々手前品々覚書帳」九冊が、完全に残つていることなどを知らされたことです。当時農民史の研究から、次第に農村を背景に成立した近世在郷町に、学問的な興味が移つていた私は、町史編纂の計画は

さておき、上記元禄の品々帳の存在に強く心をひかれました。それは、戦後早々からその頃まで十年近く、かなり熱心に越中の在地史料の調査を行つていた私にも、これ程価値の高い史料を手にしたことは、初めての経験であったからであります。

この品々帳が作成された元禄ころは、城端町の創立から百二十年を経過して、門前町、市場町から在郷町へと成長し、町の主要産業である絹織物業を中心として、経済的大繁栄していたころです。上方の京、大坂を中心とした華麗な元禄文化の一端が、この雪深い北陸の山麓の町で生産された絹によつて飾られていたことは、日本歴史の展開の上にも興味深い事実であります。そして本書の主題である城端の曳山祭りが成立するのは、この元禄期が終つて、次の享保期にはいつてからであります。

城端の絹織物業は、その後、好不況をくりかえしながらこんにちに至つておりますが、この間絹産業を媒介として、城端は上方および江戸という、幕藩制下の中央と深く結びついておりました。また城端は藩政期には加賀藩の治下におかれていましたので、城下町金沢の影響をもろに受けたことは、言うまでもありません。かくして城端の曳山や屋台は、上方、江戸、金沢の文化の導入によるものであり、これを担つたのは、絹産業によって潤おつて意氣のあがつた城端町人たちでした。それは、京都祇園祭りの山鉾の成立と運営が、豊臣期に繁栄した京の町衆によつて担われたのと軌をひとつにするものです。

このような事情を背景にして、城端の曳山祭りが成立しました。それは地方文化の水準よりみて、非常に格調の高いものです。もちろんこんにち運営されている曳山祭りは、星霜を重ねるにつれて幾多の改変を経ておりますが、基本的には、元禄文化を背景に成立した曳山祭りの伝統を継承していることは言うまでもありません

ん。民衆によつて支えられる祭りとは、本来そついうものなのです。

私は本書の編纂過程で何回か町を訪れ、編纂委員会に出席し、資料の調査にも参画しました。しかし、第一章以外の本書の主要部分は、細川健太郎、小原白照両氏をはじめ、すべて町在住の編纂委員によつて調査執筆されたものです。本書が、日本の曳山史研究に何らかの意義をもつとすれば、それは先祖代々、この曳山祭りを愛し、これを支えてきた城端町民の熱意がもたらしたものであることは間違ひありません。私は本書の原稿のすべてに眼を通し、若干朱筆をいれたところもありますが、執筆者の意を損うことのないよう留意しました。それは、本書が町在住者ならでは出来得ない特色をもつてゐると考へるからであります。

ことし八月下旬、残暑なお厳しいころに原稿を受取つた私は、公務の合間をぬつように、かなり根をつめて仕事を進めましたが、よつやく朱筆を擱くことが出来たいま、窗外にはすでに秋の気配が濃くただよつています。そろそろ農村では秋祭りのはしりが始まるころですが、大学構内のこの部屋には、笛、太鼓の音の聞えるすべもありません。それでも私の眼前には、あの豪華絢爛たる城端曳山の姿が浮かび、耳朶には山車の軋みが聞えてくるような気がします。

昭和五十二年九月敬老の日の翌日

富山大学教育学部長室にて

富山大学教授
文学博士　坂井誠一

城端曳山史目次

第一章 城端曳山成立の背景

一、川上地方と一向一揆	1
二、善徳寺と城端の開町	3
三、市場町として成立	3
四、城端市場の成長	6
五、在郷町として発展	9
六、町の構造	13
七、町人資本の蓄積(一)蔵宿	19
八、町人資本の蓄積(二)貸方	23
九、絹織物業の成立	27
十、原料糸の产地	30
十一、城端絹の盛況	31
十二、絹織物業の組織	34
十三、上方、江戸市場への進出	38

西、元禄の好況と享保の不況

第二章 曜山祭の成立

- | | | |
|--------------|----|----|
| 一、享保の経済不況 | 45 | 39 |
| 藩財政の窮乏 | | |
| 享保の飢饉と絹業不振 | | |
| 絹屋と下請業者 | | |
| 市場の復興 | | |
| 二、新しい町造りの氣運 | 50 | |
| 町民の経済的負担 | | |
| 町の戸数と人口 | | |
| 新しい町造りへの胎動 | | |
| 三、曳山祭の成立 | 56 | |
| 大神宮社殿の再建 | | |
| 曳山祭の誕生 | | |
| 曳山祭の禁止と祭礼の確立 | | |
| 曳山祭はいつ再開したのか | | |

第三章 曳山祭の発展

- 一、曳山祭の流行
 - 加賀藩のお家騒動
 - 宝曆の城端騒動
 - 善徳寺本堂の再建
 - 城端絹屋と京都問屋
 - 曳山祭の流行
- 二、安永の曳山訴論
 - 事件の概要
 - 事件の経過
 - 事件の結果
- 三、曳山祭の再建
 - 出丸町の延命地蔵
 - 赤字財政と天明の飢饉
 - 下請業者の増加
- 文運の興隆
- 曳山修復と人形の完成

四、曳山祭の確立

化政期の藩政と文化の大火

江戸市場の開拓

天保の御改法と五箇山取引

城端の化政文化

山番と稽古番

五、幕末の曳山祭

幕末の藩政

嘉永の大火と絹の増産

曳山祭の中絶と社会の動搖

曳山祭の再興

第四章　曳山祭の盛況

一、曳山祭の改革

新しい行政組織

明治初期の絹織物業

城端の文明開化

曳山祭の改革

二、庵屋台の整備

町制の施行と明治の大火

綱業の近代化

明治中期の文化と生活

庵屋台の整備

三、曳山の改装

明治末期から大正へ

城端の産業革命

城端の近代文化

曳山の改装

第五章　曳山祭の継承

一、戦争と曳山祭

昭和初期の経済動向

曳山祭への愛着

城端の戦時体制

神明社の郷社昇格

二、曳山祭の復活

戦後の諸改革と町村合併

城端産業界の変貌

戦後の城端文化

曳山祭の復活

三、曳山祭の継承

五箇山隧道の建設運動

産業の躍進と不況の到来

麦屋祭の盛況と文化財の保護

曳山祭の問題点

第六章　曳山祭の運営

一、祭の準備

冬から春へ

曳山連合会

曳山祭の運営

庵唄の稽古

獅子舞の稽古

祭を告げる子供の太鼓

神明宮敬神会

神輿や曳山の担い手・曳き手

二、宵

祭

山藏の扉をあける日

山宿と飾り山

御旅所

庵唄の奉納

三、曳山祭

マツリとサイレイ

傘鉾と曳山と庵のある祭

獅子舞と剣鉾

傘鉾と傘鉾才許

神輿の渡御

神様宿

浦安の舞

曳山の順路

庵唄の所望

帰り山

四、祭の後始末

神明宮の大祭

山藏の扉をしめる日

新役員の選出

祭礼と経費

第七章 庵
唄

一、曳山祭と若者たち

祭と若者

祭礼と芸能屋台

若連中の構成

二、屋台囃子と庵唄

屋台囃子

庵唄の名手たち

庵唄の変遷

替唄のかずかず

三、新しい替唄

替唄の作詞家たち

新しい替唄

庵唄年表

稽古番記録

第八章 傘鉾

一、曳山の原形

神を招く座

静から動へ

神座を象徴するもの

二、单纯化された移動神座

傘鉾と笠鉾

鉾と神事

カサと飾りと幕

カサと神さま

古い姿をまもる傘鉾

三、城端の傘鉾

城端祭の移りかわり

傘鉾とヨタデの舞

各町の傘鉾

第九章 曜山をつくった人びと

一、加賀文化の導入

はるかなる創始者

仏教王国と工芸

加賀藩の細工所と百工比照

二、城端の美術工芸

城端蒔絵の起こり

城端塗の漆工たち

指物細工と檜物細工

城 端 焼

画家の群像

特権大工とその流れ

仏師と彫物師

第十章 曳山

一、曳山の変遷

富山県内の曳山

曳山と屋台の区分

曳山形成への動き

創造から改修へ

二、曳山の構造と特色

構造と装飾

蟻色塗と塗っ放し

曳山の見どころ

明治大火後の改造

三、各町の曳山

各町曳山の特色一覧

曳山構成部分寸法表

西下町・諫鼓山

西上町・竹田山

東下町・東耀山

出丸町・唐子山

大工町・千枚分銅山

東上町・鶴舞山

付記

鉢
曳山

概念図

山宿年表（明治以降）

城端曳山史年表

参考文獻

「城端祭」の歌詞と楽譜

城端史編纂の経緯